

放送大学通信

on air

オン・エア

no.
66

発行日 平成14年6月10日

発行 放送大学

〒261-8586 千葉県美浜区若葉2丁目11番地 043-276-5111(代)

CONTENTS

平成13年度放送大学卒業式

AAOU第15回大会参加記

助教授 大橋理枝

就任のあいさつ

教授 大曾根 寛／教授 西川泰夫／教授 新井郁男／
助教授 佐藤仁美／教授 山田辰雄／教授 林 敏彦／
教授 天川 晃／教授 山口浩一郎／教授 大橋英寿／
教授 柏倉康夫／教授 香山壽夫／教授 渡辺 保／
教授 山内久明／教授 徳丸吉彦／所長 西原 浩

退任のあいさつ

教授 ミツ木任一／助教授 今井悦子

平成14年度大学院開設科目紹介

福祉政策I(02)

教授 松村祥子／千葉大学 教授 大森 彌

学校臨床心理学(02)

教授 馬場 謙一

学習センターの整備

栃木学習センターの整備 ―地域社会への浸透をめざして―

平成14年度第2学期学生募集

平成13年度 放送大学卒業式



平成14年3月17日、平成13年度卒業式が東京ベイN.K.ホールにおいて挙行されました。当日は、文部科学省、総務省、NHKなどから多数の来賓を迎え、およそ1,200名の卒業生が出席しました。学歌合唱、来賓紹介の後、平成14年3月卒業生に対して卒業証書・学位記の授与が行われ、学長告辞、文部科学大臣及び総務大臣からの祝辞に引き続き、卒業生総代の答辞で閉式となりました。学長告辞等の内容については次のとおりです。

学長告辞

放送大学長 丹保憲仁

今日ここにめでたく卒業を迎えられた3,321人の皆様に、放送大学を代表して、お慶びを申し上げたいと思います。

皆さんがこの大学で学び始め

られた動機はさまざまであったと思います。入学以来今日まで、それぞれに明確な目的を持って、さまざまな環境の下で、一人テレビやラジオに向かい印刷教材をひもとき、求めるものを学び続け、それが成就した具体の印として、放送大学の学士（教養）の学位を獲得されるに至ったことは、何物にも代え難い喜びで



あろうと思います。心からお祝い申し上げます。ご家族、友人、学習センターの仲間など多くの人々に支えられて、今日の成業に至ったことと思います。楽しかったこと、苦しかったこと、くじけなかったこと、くじけても起きあがったこと、多くの大切な思い出をこの年月に持ったことと思います。

この日この時、ひたすらに学び続けて学士になられた皆様に、放送大学長として卒業証書をお渡しし、お祝いを述べる事が出来ることは、本学の教職員と私自身にとって代え難い幸せであります。この大学のモットーは、「誰でも」が「いつでも」「どこでも」学べるということは皆さんご承知の通りです。しかしながら、誰でもが「学びとおせる」わけではありません。刻苦勉励という言葉がありますが、「卒業に至るまで、さまざまな困難を越えて、がんばり切ることを学んだこと」が、おそらく皆さんがこの大学で「学士」となられた一番の価値であろうと思います。ここで得たさまざまな知識や理解、さらには良き仲間、もしかしたら良き敵（かたき）に巡り会ったこともまた人生の大きな宝であろうと思います。自らの持続する意思と努力で階段を一つ登られたことをお慶び申し上げます。

放送大学は平成10年度第2学期から全科履修生を全国の学習センターで受け入れ始め、全国各地から全課程を経て学士となられた方々を世に送り出してまいりました。今年で、放送大学学士（教養）となられた卒業生は2万人を超えました。多くの先輩が学んだ知識と得た体験の下に世の中で活躍しております。科目履修の方等を加えるとその数は膨大なものです。日本の生涯学習の要であるこの大学で、自ら学習に打ち込んだ年月を人生の誇りに思ってください。

20世紀の終わりに地球の総人口は60億人を超えました。我々がこれから生きて行こうとする21世紀末の地球総人口は100億人を

超えるのではないかと考えられています。今の世界人口でも、総ての人々が欧米や日本なみの生活レベルを得ようとすれば、地球が3つほどなければ、その必要を満たせないのではないかとわれております。

20世紀に至るまでの200年余の世界は、西欧近代型文明を主な行動規範として、その総人口と生活レベルの双方について高度成長を続け、人が地に満ち、廃棄物があふれ、その結果、地球の大きさが人類の活動の限界を定めていることが人々に実感され、地球環境制約の時代を迎えるに至りました。近代をもたらし化石エネルギー使用の限界が、地球温暖化現象の顕在化によって露わになり、20世紀までのような大成長がもう難しくなっ、社会の総活動度を制御しなければならぬことに人々は気づき始めました。同時に、近代世界の大成長の中で生じた地域間格差、いわゆる南北問題が、極めて深刻な問題として人類の前に立ちだかっています。地球規模での単純な成長の抑制と同時に、成長に遅れた地域のレベルアップが求められるということは、21世紀人類社会の持つ最大のジレンマであろうと思います。

この21世紀の初めでも、世界人口はまだ成長を続けています。特にアジアの人口は歴史上の最高速度で現在も成長しています。世界の唯一の超強大国であるアメリカの人口もまだしばらく成長を続け、現代世界をアングロ・アメリカ流の「自由競争を主軸においた生き方を良しとする」、グローバル化で世界をリードしようとしております。しかしながら、この世紀の初めに、ヨーロッパと日本は人口の成長をほぼ止めました。しかも我が日本は、急速な少子高齢化の進行でこの世紀の終わり頃にはまた昭和初期・1930年代の7000万人位の人口に戻るのではないかとわれています。21世紀のジレンマに最初に本格的に突入した先進国として、日本は未

来の歴史に書かれるかもしれません。

徳川時代の200年を越える鎖国時代に、自然エネルギーのみで農林業型の循環型社会を長期間・大規模に動かした世界史上にまれな経験から推してみると、その後の科学技術の進歩を加えても、この四つの島からなる日本が自然循環の下でグリーンに生きていける人口は4000万人から5000万人位が上限のように思われます。それを超える人口は、この国土の自然の上では過剰人口であり、世界のまだ余裕のある成長中の諸国や地域に資源を求め、製品を輸出して生きて行かねばならないこととなります。これからの数10年の間に世界のほとんどの国や地域も今の日本と同じように、生活が高度化し少子高齢化が進み、人口成長を止める状況になるでしょう。その時代に至れば、さまざまな国や地域がそれぞれの得意技を公平に交換して、世界は成り立つようになるでしょう。そして、食料や基本的な資源やエネルギーの自立を出来るだけ進め、国や地域間ではそれぞれの文化・技術・社会運営の得意技を磨き、あらゆる国や地域はそれら知識と製品を対等に交易しあって、相互に支え合う真のグローバル化を創って行くことが求められるでしょう。

20世紀までの近代社会は、個の確立と自由な競争による成長が時代の特徴であったといえます。封建時代の個の束縛からの解放こそが教育、社会開発の目標でありました。21世紀は環境制約の中で人類が生き続けて行くことを求められる時代であり、優れた個を尊重しつつも、共生と調和を基調とする新文明を創成することが求められる時代であろうと思います。別な表現を求めれば、プライベートのみを最大限に求め続けたことを止揚して、自分以外のもの、すなわち環境、パブリックをも重視しなければならない時代に入ると考えてよいであろうと思います。

そのためには、複数の領域にまたがる高度の知識を持ち、他の人々と連帯し物事を多面的に扱えるような複合的な学習が、個々人についてどうしても必要になります。そして、地球の置かれた環境を俯瞰的に理解できる知識と、環境制約時代の共生の倫理をわきまえた地球市民としての行動力が求められるでしょう。いま我々に求められている教養はまさにこれらのことに答えるための素養であり、20世紀のそれとは少しく異なるようにも思えます。放送大学でその幾分かを学び取っていただくことが出来たと思います。これからの人生に何事かを加える際の土台として活用していただければ幸いです。

海を隔てた隣国に、近代文明の上でまだ成長を続けるアメリカや中国などの大国があります。これらの国々と巧みに共生を続けながら、近代日本の閉塞状況を乗り越えて、近代の次に来る新成熟文明の創成者と成りうるかどうかがいま日本人に問われています。新世界文明への展開規範を我々日本人が提示出来るか、それをなしえずに衰退することになるかが、今厳しい条件の下で問われているように思います。

真の地球人類社会が成立するまでの長い年月、個々人の存在と人類全体の生存を共に考える際の重要な中間項として、日本人が柔らかでしなやかな殻をどのように保持し、自らをどのように高め、世界のためにどのように働くべきかが、今ようやく論じ始められようとしています。皆様の学習成果は、個々人の向上のためだけでなく、自分を取り巻く環境のためにパブリックに使ってこそ、その輝きを増すのではないかと思います。

皆様方のご健康と知的世界での今後のご精進と、さらには学んだ学問の社会への価値ある還元を期待して告辞といたします。

文部科学大臣祝辞 文部科学大臣 遠山敦子



本日、めでたく卒業式を迎えられた皆様、おめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。

本年度、放送大学を卒業される皆様は、幅広い年代にわたり、様々な職業や経歴をお持ちの方々にいらっしゃいます。

放送大学は、入学試験がなく、誰もが入学できる大学であります。卒業するのは極めて難しい大学と言われております。

皆様は、学びたいという強い意志、並々ならぬ努力、そして周囲の方々の温かい支え、励ましによって、多くの困難を克服し、本日の卒業式を迎えられたものと思います。皆様のこれまでの御努力にあらためて敬意を表します。

放送大学は、国民に広く開かれた大学教育を行うことを目指し、テレビ・ラジオを効果的に利用した新しいタイプの大学として、昭和60年に最初の学生を受け入れて以来、本年で17年目を迎えるに至りました。

21世紀は、全地球的な規模で社会が急激に変化する時代となることが予想されます。そのような中で、国民一人一人が、真に心豊かな人生を送るには、しっかりと自己を確立するとともに、常に新しいことを学び続けるという姿勢がますます必要となると考えます。

文部科学省としても、新たな

「知」の時代を切り拓いていくため、多様な学習機会の拡充など生涯学習社会の実現に向けて全力で取り組んでいるところですが、放送大学はその中核的な機関として、今後一層大きな役割を果たしていくことが求められております。

本年度から、放送大学に、高度専門職業人の養成を目的とした通信制大学院が開設されました。更なる高度な教養教育の場として、卒業される皆様をはじめ、多くの方々に活用されることを期待しております。

皆様は、本日卒業の日を迎えられたわけですが、卒業とはまた新たな出発でもあります。今後、これまでの御努力の成果を活かし、各方面での一層の御活躍をお祈りするとともに、さらに深く広範な「生涯学習」を続けられますよう願っております。

最後に、丹保学長をはじめとする放送大学関係者の皆様方に対し深く感謝申し上げますとともに、放送大学のより一層の御発展を祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

総務大臣祝辞 総務省大臣官房審議官 藤岡道博



本日、ここに平成13年度放送大学卒業式が挙行されるに当たり、一言お祝いの言葉を申し上げます。

皆様、御卒業誠にありがとうございます。

皆様は、年齢層も幅広く、また、職業をお持ちの方も多いと伺っております。御入学以来、学業を全うするため、強い決意と日々の御努力の積み重ねによって、本日、晴れてこの喜ばしい日を迎えましたことに、心から敬意を表します。

また、学生の要望にこたえ、放送大学の円滑な運営に御尽力された関係者の皆様に、併せて敬意を表します。

現在、わが国では、より充実した人生を送ろうと、働きながら、あるいは家庭にしながら、キャリアアップのため勉学に励まれている方々が多数おられます。皆様におかれましては、御卒業後も学習の成果を生かして社会の各分野で御活躍され、皆様の後続く方々の大きな励みとなっていたただけるものと期待いたしております。

さて、せっかくの機会ですので、放送により勉学に励んでこられました皆様に、最近の放送分野の状況を御紹介申し上げたいと存じます。

放送は、今、衛星放送、地上放送、ケーブルテレビなど全ての分野でデジタル技術の導入により大きな変革期を迎えております。放送のデジタル化は、わが国のIT革命を支える重要な基盤の一つとされており、今後、放送は、国民生活に最も密着したメディアとして、また、豊かな生活を保障していく中核的なメディアとして、一層発展していくものと考えております。

放送のデジタル化は、高品質な映像・音声、データ放送、双方向サービスなど国民生活にとって多くのメリットをもたらすものではありますが、当然のことながら、教育・教養分野にも大きな効用をもたらすものと言えます。

例えば、ハイビジョンテレビによる臨場感あふれる高画質、高音質の教育・教養番組の視聴が可能となるほか、データ放送により付加価値の高い学習関連情報を自由に検索できるとともに、双方向機能を活用することにより学習理解を一層深めることができるようになります。

さらに、蓄積機能を持ったサーバー型放送サービスにより、多様な生活スタイルに応じ、時間の制約にとらわれることなく、自由に視聴することが可能になるなど、教育・教養分野は、デジタル技術の可能性を最大限活用していただきたい分野の一つであります。

総務省といたしましては、デジタル技術の恩恵をより多くの国民が享受できるよう、今後とも放送メディアのデジタル化の進展に資するよう環境整備に取り組んでまいりたいと考えております。

放送大学におかれましては、あらゆる方々がより充実した人生を送るため、働きながら、あるいは家庭にしながら、誰もが等しく豊かな教育を受けられるよう、デジタル技術のメリットを十分に生かし、放送番組による教育の一層の充実に努められ、生涯学習機関として中心的な役割をこれまで以上に果たしていただくことを期待しております。

最後になりますが、本日御卒業される皆様の一層の御活躍と、御臨席の皆様の御健勝を心より祈念いたしまして、お祝いの言葉いたします。

答辞

卒業生総代 発達と教育 菅沼寛順

本日はお忙しい中、卒業式に御臨席いただき、胸を打つご祝辞をくださいました御来賓の方々、並



びに、わたしたち卒業生のためにこのような盛大な式を挙行してくださいました、学長先生、諸先生方、職員の皆様に心よりお礼を申し上げます。

きょう共にこの良き日を迎えることの出来ましたわたしたち卒業生一同は、社会的立場や学ぶ目的はそれぞれ異なっていますが、「学ぶ意欲」と「学習することを楽しむ」という姿勢は全員に共通したものだと確信しております。わたし自身は、放送大学で学ぼうと決意したとき、何があっても楽しく学ぶことだけは忘れまい、と自分に約束をしました。その誓いを守ってきたからこそ、きょうという日を迎えられたのだと、いま大変うれしく思っております。

高校を卒業し、静岡県ローカルテレビ局で報道部の契約カメラマンとして働いているわたしは、以前から人の心について系統だった学習をしたいと考えておりました。しかし、大学や専門学校で学ぶとしても、現在の職業を辞めて上京する必要がある、頭を悩ませていました。そんな折「いのちの電話」を取材対象として取り上げる機会があり、そのとき出会った相談員の方にその話をしたところ、働きながら本格的に学べる放送大学のことを教えていただいたのです。

わたしの放送大学生としての日々は、平成9年4月からスタートしました。当初は静岡学習センターの分館に当る浜松市の施設まで足を運んで学習しておりましたが、C Sによる衛星放送が始まっ

てからは自宅で好きな科目を自由に選択することが可能となりました。うれしさのあまり調子に乗って1学期に10科目も選択し、ひどく苦勞したことを覚えております。それにしても、仕事と学習の両立は、当初考えていたほど生易しくはありませんでした。報道の仕事は昼夜を問わず臨戦体制にあります。夜中に火事の現場を撮影したあと、そのまま眠らずに単位認定試験を受けに行ったこともありました。それでも学習を途中で放り出さなかったのは、やはりそれが「楽しさ」に裏打ちされていたからだと思っております。

卒業研究ではジェンダーをテーマに選びましたが、その後、体調を崩したり、仕事が多忙を極めたりで、なかなか思うようにはかどらず、結局提出までに2年かかってしまいました。しかし、担当教授や仲間たちの温かい励ましのおかげで、投げ出すことなく、集め

た膨大なデータを足がかりに、どんなときなんのために人間は性役割行動を取るのかについて、その輪郭を掴むことができました。さらに、この研究を通して、ジェンダー問題が、心の病をはじめとするほかの多くの問題とも密接に関わっていることも理解することができました。

放送大学での講義や卒業研究によって、わたしは人間の心というものがある他人との触れ合い如何で、さまざまに変化していく可能性があるということを知り、ともすれば結論に向かって一直線になりがちな報道取材の仕事においても、自分と対象者の心情の変化に沿いながら、撮影や記事の方向性を柔軟に変えていくべきだと考えるようになりました。そうすることが誠実であり、またリアルであるということを知ることができたので

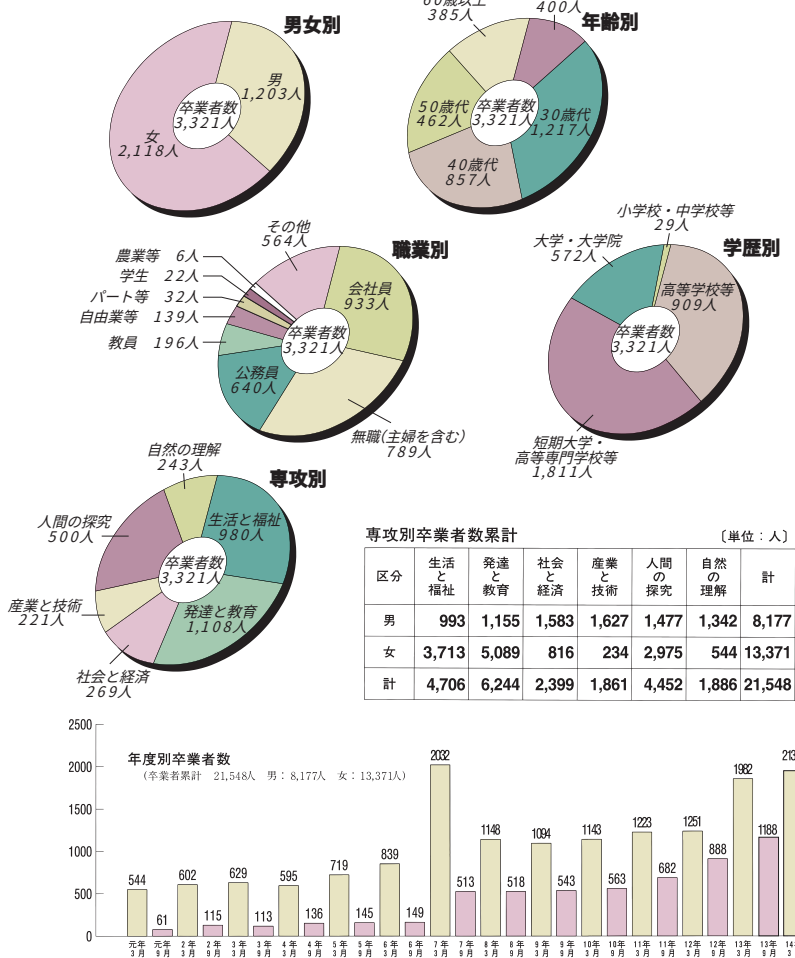
わたしは放送授業や卒業研究に

おいて未解決な課題をたくさん残しておりますが、それらは次なるステップとして、働きながら大学院への進学を目指すというわたしの動機を大いに触発するものでもあります。良い意味での「未完」であり、これからがわたしの新しい始まりだと思っております。

このように先人の知識に学ぶこと、そしてそれを足がかりにして自ら考えていくこと、これは放送大学という宝島から、わたしたち卒業生が探し当てたかけがえのない宝物だと思います。

最後に、学ぼうとする人たちの思いを汲み取り、常に最善を尽くして下さった諸先生方と職員の皆様、温かく励まし支えてくれた大学内外の友人、仕事仲間、家族に心から感謝するとともに、放送大学の益々の御発展と御臨席の皆様の御健康と御活躍をお祈り申し上げます。答辞といたします。

平成13年度卒業生概要



平成13年度卒業生数

	生活と福祉	発達と教育	社会と経済	産業と技術	人間の探究	自然の理解	総計
平成13年9月	364名	366名	94名	81名	194名	89名	1,188名
平成14年3月	616名	742名	175名	140名	306名	154名	2,133名



学歌合唱

作詞 那珂太郎 作曲 柴田南雄 指揮 藤川能巳
ピアノ 田中百合子 合唱 放送大学千葉学習センター、群馬学習センター、神奈川学習センターの合唱団

卒業生からひとこと

私は3年に編入し1年半で卒業単位を満たしましたが、学ぶ中で思ったことは本人の持つ意志によって左右される戦いの時間であるということです。学ぶ強い意志に支えられれば結果が引き寄せられることを確信できました。

生活と福祉 山本愛子

専業農家として施設トマト経営のかたわら、一念発起して入学。覚悟していたとは言え、単位認定試験勉強は予想以上に大変でした。それでも根気と忍耐でついに卒業までこぎつけました。この感慨を一生の糧とします。

生活と福祉 福島清浩

私の若い頃は学ぶ自由をめぐまれませんでしたが、今回は4度目の卒業式に参加できたことを感謝します。平均寿命を越えた私は、これからも志は高く明るくをモットーにして放送大学で学びます。

生活と福祉 佐々木雄一

私は勤務しながら卒業することが出来ました。一つの方針に固執せず、広い視点で学習出来るのが、放送大学の最大の魅力だったと思います。在校生のみなさんも、2足、3足のわらじで将来をじっくりみつめて下さい。

発達と教育 津藤志津子

このたび本大学の卒業式を家族と共に迎えることができた事は、生涯忘れられない思い出です。主婦、司書、学生であった2年半は、今後の人生の励みです。本学で学んだ“生涯学習”の姿勢を実践し続けたいと思います。

発達と教育 腰塚美奈子

自分の興味や関心を引いた科目を選択しましたが、そこから思いもかけない興味が広がっていくという経験をしました。自分も知らない自分を発掘するという、放送大学には、「見えない可能性」が広がっています。

発達と教育 小野真美

4年間で卒業を目標に1996年2学期に入学しました。英語で苦しみ4年間で卒業する事は出来ませんでした。その分長く勉強出来ました。最後迄あきらめずに努力したかいあって階段を一つ登る事が出来ました。

社会と経済 鯨 好則

学歌の「生きるとはまなぶこと、まなぶのはたのしみ。生きるとは知ること、知ることはよろこび。」私は放送大学に入学してこのことを本当に実感しました。そして、何でも中途半端に終わらせた人生の中で達成する喜びを知りました。

社会と経済 小渕 肇

生涯学習として学び始めてから早14年目となりました。放送大学は多種多様な科目が設定されており、多角的な面から学習するのにも、大変適しています。これからもさらに学び続けていきたいと思っています。精進！

社会と経済 平瀬 源

1984年に工業高専を卒業し、コンピュータ関係の企業に勤務しましたが、親会社の変更、工場閉鎖等、事業環境が全く変わってしまいました。1998年より放送大学で学んだ科目は、仕事や資格取得に非常に役立ちました。

産業と技術 黒瀬 浩

お陰様で2度目の卒業が適いました。古希を過ぎた今、元気で学び識ることの喜びを味わっております。

4月からは、教養学部と大学院の科目生として継続入学しました。今後ともよろしくお願い致します。

産業と技術 柳田義之

本日の卒業式は私にとって2回目である。最初の入学の動機は自然界の仕組を勉強したいとの気持ちであったが、そのうち段々と新しい問題が生まれて来て次々と範囲が広って、未だまだ終りのない楽しい学生時代が続きます。

産業と技術 赤嶺治美

ご指導いただきました諸先生方、大学関係の方々にお礼を申しあげます。そして“この年齢まで頑張ったな”と自分に、応援してくれた妻に勲章を。共に励まし合った多くの学友に感謝を。この4月再入学し新出発します。

人間の探究 金田 昭

目標達成、気分爽快、ゆるやかな期限付きで出発した学びの場。かねてからのあこがれの放送大学にめぐり逢えて心躍る青春時代をとり戻したようでした。これからも益々恋慕していきたいものです。

人間の探究 高橋寿江

卒業式で改めて多くの仲間のいたことに感慨を覚えた。生涯教育のつもりで始めた勉強だったが、何よりの収穫は新しい学友との出会いだった。そして、卒業研究を仕上げられたことも大きな喜びだった。多謝。

人間の探究 綾部 剛

やっと卒業いたしました。入学以来いろいろな事がありました。最後は出産、新築と重なり何が何だかわからないまま卒業してしまいましたので、さらに勉学に励んでいきたいと思っています。

自然の理解 長島静枝

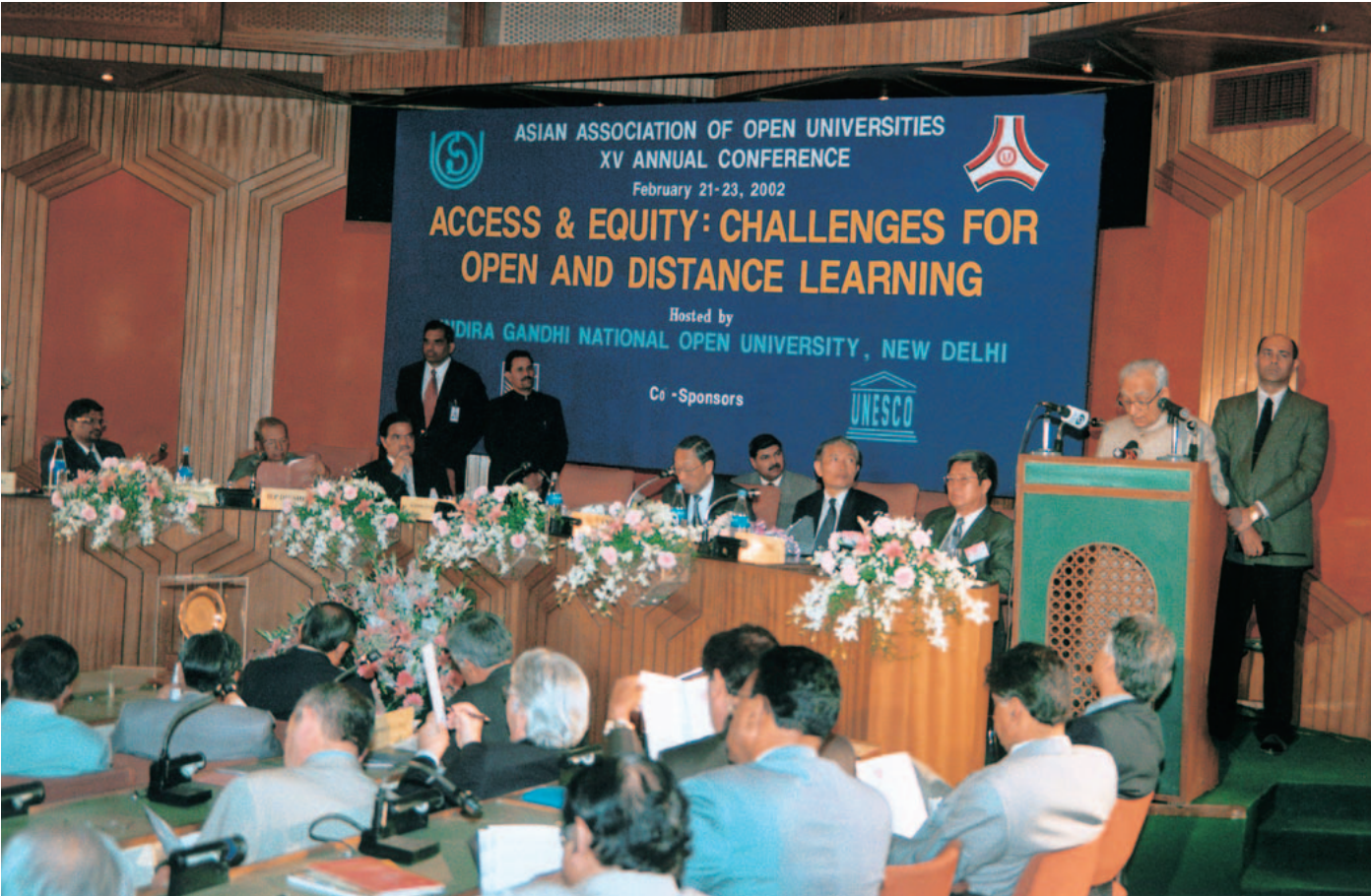
入学した時小学生だった娘は、この春大学生になります。娘と共に机に向かったこの8年間でした。卒業研究では学問の辛さも知り、そして直接先生にご指導いただける貴重な時間でした。これからも自然の理解を深めてまいりたいと思っています。

自然の理解 明石和泉

私は就職と同時に放送大学に入学しました。当時は学生生活と社会人生活の両立に不安の日々でしたが、実際にはじめてみると、仕事面でつらいことがあった時など放送大学の授業を聞くとかえって心みちみちしました。

自然の理解 須藤紀子

(敬称略)



開会の辞を述べる現職インド副大統領

AAOU 第15回大会参加記

人間の探究 助教授 大橋理枝

去る2002年2月21日から2月23日にかけて、インドのジャミア・ハンダード大学を会場として、第15回アジア公開大学連合年次会議が開催された。この会議はもともと2001年11月上旬に予定されていたものであったが、当時のパキスタン・アフガニスタン情勢などに配慮して半年延期され、上記の日程になったという会議であった。本学からは今回、岩永教授を団長として5人のメンバーが参加した。

アジア地域において遠隔教育を実施している大学の連合体であるアジア公開大学連合は、中近東までのアジア地域に約30校の正会員校を有している他、賛助会員校としてイギリスのオープン・ユニバーシ

ティやカナダのアサバスカ大学などアジア以外の地域の大学も参加しており、総参加校は50校前後にも及ぶ。1987年の創設以来、正会員校のいずれかが主催して毎年年次会議を開催しており、今回の開催校はインドの国立インディラ・ガンジー公開大学であった。AAOUは正会員校の中の1校が議長校となり、6～8校が役員校となって運営されているが、議長校及び役員校の選出は3年ごとに選挙で行われる。今年はその選挙の年に当たっており、放送大学も次期役員校の候補として名前が挙げられていたもので、我々も21日の大会に先立って行われた20日の総会からの出席となった。

会場周辺の様子

今回の年次会議の会場となったジャミア・ハンダード大学は、デリー市のほぼ南端に位置する。様々な人種、宗教、階級、景観を呑み込んで活発に営みを続ける首都デリーに、インドの歴史と懐の深さを感じた。

デリーは大国インドの首都であるだけに、様々な政府関係や外交関係の建物が立ち並ぶ地区がある。かつて大英帝国の植民地だったことをしのばせる大振りの町並み、特に首相官邸から議事堂の前を通過してインド門（パリのシャンゼリゼ通りにある凱旋門のインド版のようなもの。戦没者慰霊のために建てられたものであり、周辺部分が公園になっている。）まで一直線に伸びる片道3車線の広い道路は、壮観であると同時に威圧感をも与える。一方、外国大使館が立ち並ぶ通りでは、イギリス大使館が他2,3カ国の大使館と同じ並びに建っていたのに対し、道の反対側は一区画が全て中国大使館の敷地であるという、皮肉な現状もある。

政治や外交の中心を担っている部分は世界各地の大国の首都と同じような雰囲気を持っているが、一歩その地域から外に出ると人々の活気に満ち溢れたデリーの街の喧騒に囲まれる。タクシーの後部、バスの後部、オトリクシャ（タクシーの三輪車版のようなもので、「人力車」ならぬ「自動力車」の意味らしい。）の後部など、あらゆる所に「警笛鳴らせ」と書いてある。方向指示機やサイドミラーがない車が相当多く見られ、追い越す時には後ろの車が警笛を鳴らしながら前の車の横をすり抜けて行く。道路に車線は引いてあるが、その間をぬって車が入り込んでいく。信号で止まると、3車線のはずの道路に、5

列にも6列にも車が並ぶ。そして、大きな交差点などで右折しようと右車線にいと、隣の車線、ひどい時には2列隣の車線からも、堂々と右折して来るのである。これでは「警笛鳴らせ」の標記もやむを得ないかと思われる一方、何台もの車が同時に警笛を鳴らすと、誰がどの車に対して鳴らしているのか判断できないのではないかという心配がよぎる。

大きな道路の中央分離帯には何頭も牛が居る。牛はヒンドゥー教では聖獣なので、誰よりも堂々として、中央分離帯の所に立ったり座ったり、或いは道路にまではみ出して座っていて、車はその牛を避けて走っていく。車が相当のスピードですぐ脇を通っていくのに、牛は顔をそむけもしない。更に、道路の一番歩道側の車線には、人を乗せた象が悠々と歩いたりする。夕暮れ時に映画館の看板を見ると、その上を猿が何匹か横切って行くのが見える。市の中心街に近いモスクの周りでは、駱駝や山羊や羊を売っている。何でも、ラマダン明けに生け贄として捧げるための動物を売っているとのこと。おまけに、神に捧げる物は飾り立てる必要があるらしく、山羊や羊は赤や黄色などの水玉模様に塗られていたりする。

インドは多くの王朝が栄枯盛衰を繰り返してきた土地でもあり、今ではかつての支配者の末裔と被支配者の末裔とが隣同士を歩く街になっている。色鮮やかなサリーを纏って歩く女性達の間を、ターバンを巻いたシク教徒達や、モスクでの礼拝のための絨毯を抱えたイスラム教徒達や、ビジネススーツを着た人達が行き交い、街中で耳にする言語も様々である。タクシーの運転手なら英語が通じることかと思いきや、そう簡単にはいかない。タクシーに乗ると最初に料金の交渉から始めるのだが、礼儀正しく文章で喋るよりも、その場で必要な英単語をいかに何度も

大声で繰り返すかで料金が決まってしまう様子。運転手によって運転の丁寧さ・粗さが極端に違う上、メーターの付いていないタクシーや、メーターが壊れているタクシーもあったが、運転手は平然としている。

貧富の差はやはり激しく、タクシーが信号で止まると、必ずと言っていいほど毎回物乞いに窓を叩かれた。赤ん坊を抱いた女性が目の前に差し出す手を無視するには相当良心の呵責を感じたが、うっかり窓を開けているとタクシーの車内にまで腕を差し入れて来るのには閉口した。観光地でタクシーを降りる際には、しばらくは物売りに取り囲まれるのを覚悟しなければならない。それでもホテルは西洋式の立派な建物であることが殆どで、我々の宿泊先は水も満足に出るし、清潔でもあり、デリーの街中にありながら外部とは別世界の様相を呈していた。博物館や歴史的建造物の入館料

のみならず、タクシー料金にまで、インド人価格と外国人価格で差がつけられているのも納得できた。

このような、何もかもを受け入れてくれるようなデリーの街で、今年のAAOU年次会議は開催されたのであった。会議の途中で会場の電気が容量オーバーを起こして停電するなどの悪条件にも関わらず今回の会議が成功したのは、多くの関係者達が心を込めて尽力した結果と思われる。

AAOU年次会議

全体会議に先立って20日に行われた総会で、放送大学は次期役員校の一つに選出された。今期の議長校であり、本年のAAOU年次会議開催校でもある韓国国立公開大学(KNOU)と協力して、今後3年間のAAOUの運営に携わっていくことになる。本学はAAOUの創立以来、毎年年次会議には参加しているので、今後とも引き続きその姿勢を保つことが重要となることは言うまでもなく、更に一步踏み込んだより積極的な姿



放送大学は次期役員校の一つに選ばれた

勢が求められるであろうと思われる。

年次会議では、開会の辞を現職のインド副大統領が行うなど、国を挙げての支援態勢が見られた。このAAOU会議の開催を報道していた新聞も何紙かあった。今年の年次会議では「アクセスと公平性－公開・遠隔学習についての挑戦」というテーマのもと、20カ国以上から250人を超える参加者があった。3日間の会議期間中毎日、全体会議で基調講演が行われた後、4つの部門の分科会（「公開遠隔教育システム－規範と反応」、「教育課程・教授法及び教育プロ

グラム」、「研究・訓練及び品質保証」、及び「適切なテクノロジー」）に分かれて研究発表が行われ、発表された研究論文は合計で180を数えた。本学からは産業と技術専攻の河合助教授が、会議初日に最初の分科会の第一番目の発表者として、「戦後日本の農業及び地方開発におけるラジオ番組の役割」と題す



河合助教授はOHPとパワーポイントを駆使して発表を行った

る研究発表を行った。河合助教授の発表では、戦後日本の農村にあった農業改良普及員や生活改良普及員などの組織を紹介すると共に、これらの組織が戦後日本の復興に果たした役割や、現代の遠隔教育がこれらの組織から学べる点などが指摘され、発表終了後には活発な質疑応答も行われた。

3日間を通して行われた様々な発表や基調講演を通して浮かび上がってきた主要な点としては、公開・遠隔教育が社会的弱者（障害者、遠方居住者、低所得者などの他、イランなどのように女性達が家庭の外で教育を受ける機会がない国では女性も社会的弱者の代表格となっている）にとっていかに貴重・有力な教育機会を提供しているかという指摘の他に、公開・遠隔教育にとって、学習者の自主的な学習意欲が根本的に不可欠であるという認識が目立っていた。今回の最優秀論文がZhang&Ha共著の「香港における熟年層学習者の学習態度、動機、及び選択傾向の調査」と題された論文であったことから、公開・遠隔教育に果たす学習者の役割の大きさが確認されていることが伺えた。本学も、今後とも積極的に世界中の他の遠隔教育大学と情報交換を行い、時代の情勢を見極めていくことが必要となることは間違いない。

就任のあいさつ



2002年4月、放送大学に着任いたしました。大学院文化科学研究科の設置にともなって、政策経営プログラムの「福祉政策Ⅱ～障害者施策の展開～」を担当させていただくことになりました。あわせて、学部においては「生活と福祉」専攻に属し、社会福祉関係の科目にかかわることとなります。

私の専門分野は、社会福祉

福祉政策学の構築をめざして

生活と福祉
政策経営プログラム 教授 大曾根 寛

を制度的・政策的側面から分析するとともに、法体系(立法・司法・行政を対象に)の中に位置づけることにあります。

具体的な研究テーマとしては、①障害のある方や中高年の方の雇用や職業生活の支援を目的とする職業リハビリテーション政策、②高齢者、子ども、女性も含め、現代社会においてもなおハンディを負っている人々の権利の保障などに関心があります。前任校の愛知県立大学社会福祉学科に在籍中は、「高齢者・障害者の権利擁護に関する調査研究」を中心的な研究課題としており

ました。

今後は、福祉学を勉学の基礎にしながらも、政治学、法律学、経済学、社会学、心理学、生理学など多様な研究分野にまたがる放送大学の先生方から栄養分を吸収させていただき、社会福祉を政策科学の面からとらえなおし、福祉政策学の体系を構築することができればと願っております。

また、日常の生活の中で現実と格闘しておられる放送大学の学生さんからも多くのことを学ばせていただければと思います。

認知行動科学 ー心と行動の統合科学をめざしてー

発達と教育
総合文化プログラム(環境システム科学群) 教授 西川 泰夫

心の高い認知科学です。そしてこの分野の背後に控える科学基礎論をはじめ心理学史ならびに科学史、数学基礎論、記号論、物理諸科学、さらにコンピュータ科学などの基本素養を必須の前提にすえたものです。この認知科学に関しては、学部の共通科目のうち基幹科目の一つとしてすでに平成12年度より担当中です。その詳細は当該講義などにゆづります。他方、平成14年度に開講される大学院科目としてこの新学期より新たに担当するのが「認知行動科学」です。この科目でとる基本姿勢は、「心と行動を統合的に科学する」ということとなります。これはそもそもの心理学

内部にある分離状況を打開しその大統一を試みるという大胆な試みです。そしてこの分野の対象はまずなにより人、私たち一人一人自身であるのはいうまでもありませんが、すべての生き物から、機械類、さらには自然のあらゆる環境事象、人工的諸システム(組織や文化、社会に至る)を包括することを目指します。したがって、従来の区分や分野に限定されず、新たにこれらを統合する総合的な分野の確立が求められることとなります。そうした試みの一つとして「認知行動科学」という名称のもとでその趣旨の実現を目指そうとしています。

ところで今、あらゆる事態

での認識と位置付けに当たり、新たな知の枠組みの構築が求められています。これはパラダイムの再構築とも、構造改革ともいわれますが、これはまさに学問自体にも等しく問われることでしょう。

例えばこんな具合です。人工物、システムや機械に、心が、意識が、言葉を理解し考えることが可能か、また私た

ち自身の心身はいかに統合されているのか、その健康を維持促進するにはどうしたらよいか、いかに自律的自己実現は可能か、論点は山積しています。それらへの答えの一端は私の放送講義や印刷教材にまずはゆだねます。その一方、受講されるに当たりまず大切なことは、こうした問題認識をはじめ、それをいかに解く

か、そのための方法論からものの考え方をあらためて吟味する姿勢が不可欠です。いいかえると、なにごとにも知的好奇心をもつこと、当たり前と思われること常識や当然とされていることを見直すこと、なぜそれでいいのかその論理的根拠を絶えず確証する検証、実証する、その姿勢を大切にしたいと考えます。

社会人大学院生の研究支援をめざして

発達と教育
教育開発プログラム 教授 新井 郁男

索する17年でもありました。ほとんどの学生がキャンパス内の寮または近隣に居を定めているため、論文指導を主な目的としたゼミを、同じくキャンパス内にあるわが宿舎で、ほぼ隔週くらいの頻度で、夕方6時くらいから時間無制限ーときには明け方になることもありましてーで行い、きりのいいところで飲食となりました。それは教師が直接指導するというよりは、学生同士で論議しあうというような形でした。大学院修了後もゼミのメンバーを中心とする夏休みの研究会と冬のスキーの集いが続いてますが、それも夜ゼミの成果だと思っています。

学術的論文作成の指導という面では忸怩たるものがありますが、研究を修士課程2年で終わるのではなく、息長く持続させることができているのではないかと自負もしています。

しかし、この方式は放送大学では難しいでしょう。放送大学には創設準備段階から教材作成の面でずっとかかわってまいりましたが、学生を直接指導するのは初めてです。新たな方式の模索を始めようと思っています。「IT方式」か「会いてえ方式」か。両者をどう融合するか。定年までの年月は多くはありませんが。



大学院では「教育経営論」を担当します。社会人大学院生の指導は教師教育を目的とした上越教育大学で17年経験しました。教育を研究対象とするものとしては、学校の実態を社会人学生である小・中・高校の教師の口を通じて、また、かれらとのつきあいを通して直に知ることができ有益でしたが、同時に、いろいろな意味で多様な学生をどう指導したらよいかについて模

ともに…

発達と教育
臨床心理プログラム 助教授 佐藤 仁美

様々な現場で働いて参りました。教育相談室ではお子さんを対象に遊びながら心を解放していくプレイセラピーや、保護者・学校の先生方のカウンセリングを、大学の学生相談室では悩める学生たちの相談相手、公立中学校のスクールカウンセラーとして生徒・保護者・教職員のカウンセリング、精神科では入院患者の心のケア、小児クリニックで

は、心理・発達相談と、多岐にわたる心のケアに携わってきました。私のお伝えできることは、すべてお会いした方々から学んだことです。これらの経験を、皆さんにお伝えしていきたいと思っています。

私のスタンスはともに感じ、ともに考え…というものです。カウンセリングでは、カウンセラーはクライアントの自己治癒力を信じて任せ、ともに



2002年4月より放送大学で皆さんの学習のお手伝いをさせて頂くことになりました。よろしく願いいたします。

私は、大学と離れてからずっと「臨床心理士」として、

分かち合いながら、自らの力で問題解決していくプロセスに寄り添っていきます。たとえば自分自身にしか導き出すことが出来ません。カウンセラーは、絡んだ糸を解く作業



私は3月に慶應義塾大学をちょっと早めに退き、4月より放送大学に赴任しました。当面は、ラジオでの大学院の「国際社会研究Ⅱ(02)(中国近代政治史)」を担当します。

20世紀にそうであったと同じく、21世紀においても中国とどのようにつきあっていくかは、日本国民の最も重要な課題の一つです。今日世間では、中国市場の魅力や「中国脅威論」がさかんに語られて



大阪大学から放送大学に移ってきました。定年まで4、5年を残しての転身です。前任校に特に不満があったわけではありません。放送大学の方が「面白そう」だったからです。

この「面白い」という気持ちは、学問をする上で結構大切なものだと思います。よく学会で発表すると、論理が矛盾し

のお手伝いをしていきます。ほんの少し、きっかけを作るだけです。それには、クライエントの動機、自発性、勇気が必要です。

学習でも、同じことが言え

中国政治の全体像の理解

社会と経済

総合文化プログラム(文化情報科学群) 教授 山田 辰雄

いますが、中国の政治は一つの結論に帰結させるにはあまりにも複雑です。私は、時流に流されることなく歴史的事実を踏まえて中国政治の全体像に迫ってみたいと思っています。

この授業では、まず20世紀前半の中華民国時期の政治史を扱いますが、そこでは20世紀後半の中華人民共和国時期の政治との連続性が強く意識されています。ここを出発点として、今後は大学院・学部での授業のなかで、中華人民共和国の政治、東アジアの比較政治、世界史における東アジアなどのテーマについて語っていききたいと思います。

るのではないのでしょうか。私は、臨床とは常に学ぶ姿勢にあり、皆さんとともに感じ・考える時間を大切にしていきたいと思っています。

私はすでに一部の大学院生と接しました。彼らは実に多様な社会的経験を持っています。これは放送大学の学生の魅力です。ただし、自らの経験を狭い範囲に閉じ込めることなく、より広い、学問的に一般化された枠組みの中で研究を進めていってほしいと思います。私はその過程で手助けをするとともに、学生諸君の多様な関心を共有できるよう努力したいと思っています。

放送大学は面白そう

社会と経済

政策経営プログラム 教授 林 敏彦

ているとか、前提がおかしいとか、調査がいきとどいていないとか批判されます。でもそんな批判はそれほど大したことではありません。何とかしのげるものです。でも、お前の研究は「おもしろい」と言われると、反論のしようがありません。

私としては、放送大学や遠隔教育の可能性に面白さを感じたわけですが、そう言う、よく怪訝な顔をされます。いくら情報通信技術が発達しても、教育の本質はフェース・ツー・フェースで、師の聲咳に接する要素が不可欠でしょう、と。

でも、大げさに言うと、グーテンベルクの印刷技術のおかげで、キリストの肉声に接し得た使徒たちに何億倍する人々が聖書を読めるようになりました。私は、放送大学という大学モデルは本来の教育の粗悪な代替品ではなく、教育にグーテンベルクの転換をもたらすものだと思います。

というわけで、今年度は大学院の「経済政策Ⅰ(02)」(テレビ)を担当しています。この科目をこっそり政治家の皆さんも勉強していて欲しいな、と思ったりしています。



これまでの28年間は横浜国立大学に勤務しておりましたが、4月から放送大学の一員に加えていただきました。放送大学とは縁がなかった私にとっては、4月からは「新入生」としてまったく新しい生活が始まることになります。

私が主として研究してきたのは、第二次大戦後に行われたさまざまな占領改革の過程の研究です。とりわけ、日本国憲法と地方自治法の制定、内務省の解体などを経て戦後の地方制度が



本年4月1日付で放送大学に着任し、「法システムⅡー市民活動と法」を担当することになりました。以前は、上智大学法学部で民法という科目を教えていました。放送大学の方の科目は、NPOやNGO等の活動を取りあげる新しい研究分野なので、教える方も勉強する方も、対等の関係(equal footing)で学習する意気込みが必要だと考えています。

また、放送大学では、学生の中にもすでにこのような活

放送大学「新入生」として

社会と経済

政策経営プログラム 教授 天川 晃

形成されてきた過程を、占領政策と日本の政府や国民の対応を中心に調べてきました。アメリカ側の資料や国内の資料を読みながら新しい制度の形成と定着の過程を再構成するのは、難しいけれども楽しい作業でした。またこの研究テーマとの関係で、いくつかの自治体史の編集・執筆のお手伝いもししてきました。

放送大学で私が担当する大学院科目「地方自治政策Ⅰ(02)」の受講者は、実際に自治体の現場でさまざまな政策課題に取り組んでいる人が多いようです。私がこれまで研究してきたことが学生の方々の日常のニーズに直接に答え得るとは思いません。しかし、実務の現場に身を

置いている方が大学や大学院に期待しておられるのは、毎日の現実からは一步距離をおいた視点で問題を見ることである場合が少なくありません。目の前の問題を、歴史的流れの中に位置づけたり、より一般的な理論的な枠組みの中で理解したりすることの重要性を指摘することで、皆さんの勉強のお手伝いをしたいと考えています。

放送大学「新入生」として、新たな学友との出会いを楽しみにしています。

対等の関係で

社会と経済

政策経営プログラム 教授 山口 浩一郎

動の経験のある人が少なくないでしょうし、関心をもっている人は多いと思います。そういう人は、印刷教材を読み放送教材を聴くだけで満足せず、参考文献をひもといて意欲的にどんどん先へ進んで下さい。そして、ぜひ機会を見つけて、ボランティアという形でよいから市民活動の実際にふれてみて下さい。

2年先に、目をみはるような修士論文が、続々とでてくることを期待しています。

放送大学の教員になって一番うれしかったのは、先日同窓生の集まりがあったとき、偶然同級生の一人が全科履修生になっていて、「名前を見た。しっかりやれよ。俺も必ず聴

くから」と言ってくれたことです。こういう社会的経験の豊かな人を学生にもち、新しい科目を学習していけるのは、教師としてこの上なく幸せなことです。

このはげましを忘れず、皆さんと一緒に最後まで努力したいと思います。



研究テーマと期待

社会と経済
臨床心理プログラム 教授 大橋 英寿

者の再就職過程、東北地方の農山漁村の青年の職業選択と適応などでしたが、やがて沖縄諸島のシャーマニズム現象、さらに南米の農業移住地における日系人の生活ストラテジーや民族的アイデンティティへとフィールドも関心も拡がっていきました。中でもその精神文化の奥の深さに魅せられて、沖縄へは20数年通い続けています。南米のフィールドもボリビアのオキナワ移住地です。重症の「沖縄病」患者で、永住する以外には回復は見込めないと診断されています。

放送大学での所属は、学部

では「社会と経済」専攻、大学院では「臨床心理」プログラムの一員です。私にとって放送大学の魅力は、学生の居住地域、年齢分布、職業経歴などが多様なことです。できれば、私の方から一方的に講義することで終わるのではなく、学生諸氏のバリエーションに富んだ生活体験や人生観を知りたいのです。というのは、時代史や居住地域社会、所属集団などの制約のなかで個々人がどのように人生を切り開いて自己実現していくのかが私のテーマのひとつだからです。

生まれ育ちは北海道の旭川ですが、東北の仙台で長く暮らしました。

専門は社会心理学です。社会心理学の方法は、実験室での実験法とフィールドワーク（現場研究）に大別できますが、私は出歩くのが好きで、学生時代からフィールドワークをやってきました。これまでの主なフィールドとテーマは、当初は北海道の閉山炭坑離職



「情報」をめぐる諸問題を考える

産業と技術
総合文化プログラム（文化情報科学群） 教授 柏倉 康夫

ぶべき新たな段階に入ったと言えます。生物学的に言えば、環境を構成する要素としては物質とエネルギーですが、これと並んで人間の環境にあっては、「情報」が重要です。人間にとって情報は、食物と同じように欠かせないものですし、情報環境の変化は、私たちの生活を豊かで便利なものにする一方で、アイデンティティの危機や、リアリティの喪失といった事態をもた

らす危険もはらんでいます。さらに懸念されるのは、個人のレベルや集団レベルで情報格差が生まれ、それが時間の経過とともに拡大していくことです。

講義では私たちが直面している情報をめぐる諸問題を取り上げますが、毎回の内容を「情報化社会」を考える場合の事例研究にしたいと思っています。

新設された大学院の講義で、「情報化社会研究(02)」を担当します。どうぞよろしくお願いいたします。

20世紀に始まったデジタル革命によって、私たちの世界は工業文明から情報文明と呼



私達の都市をどうつくるか

産業と技術
政策経営プログラム 教授 香山 壽夫

今年も、例年のように3月から4月にかけてアメリカのペンシルバニア大学に教えに行っていました。毎度のことですが、日本に帰るたびに、日本の自然風土の美しさに感

心します。自然だけでなく、日本人の作り出すものも、他の国にない素晴らしいものが数多くあります。自動車も、新幹線も、そして私が専門とする建築も、世界中から最高

の評価を受けているものです。

それでいながら、その美しい自然と、素晴らしい人工物が一緒になった時に出来上がる日本の都市は、どうしてこのように雑然として醜く、落ち着きがないものになっているのでしょうか。愛着を持って毎日の生活を送り、喜びを持って子供を育て、そして落ち着いて老後を過ごすことのできる町を、どうして私達は持てないのでしょうか。

しかしながら、日本の都市は、決して昔からこのように

無秩序な醜いものだったわけではありません。江戸の終わりや、明治の初めに日本を訪れた外国人達は、日本の町の美しさに感動し、いろいろな文章や写真を残しています。近代日本は国を挙げて、その美しい日本の町を破壊して今日に至ったといっているでしょう。

ただ嘆いているわけにはいかない、と私は思います。日本の経済が大きな転換期にある今は、むしろ一つのチャンスです。今こそ私達は、営利

本位で使い捨てのように町を作る姿勢を改め、永続的で落ち着いた私達の住む町を作ることに力を注ぐ時です。

都市計画、都市デザインは、様々な専門家、色々な立場の人々が、力をあわせ、ひとつになって初めて達成できる総合的な事業です。放送大学という他の大学にない広がりをもつ研究教育の場は、その目的に向かって大きい力を発揮できると信じ、私も精一杯の力を注ぎたい、と考えております。



新しい視点

人間の探究
総合文化プログラム（文化情報科学群） 教授 渡辺 保

しいものではありませんでした。たえず両先生の新しい視点に知的な刺激を受けたことが、私自身の研究にも大きな衝撃になったからです。

私の専攻は「演劇」ですが、演劇の分野はなかなか幅が広く、同時にその見方も様々ではありません。しかし両先生の視点は、さらに大きく、演劇も文化の表象の一つとしてとらえ、その中での大きな水脈を発見し、構造を分析しようというわけですから、これまでの専門分野の視点にとらえられていては解決できない

問題が出てきます。

私はかつて東大駒場の「表象文化論」という講座で、5年ばかり教えていました。やはり「演劇」ことに古典演劇を担当していました。そこでも「表象文化」という考え方が、いかに豊かな感性を育てるかを目の当たりにしましたが、ここでの刺激はそれを上回るものといっているでしょう。これから多くの院生、学生と一緒に私自身もまた自分を磨いていきたいと思っています。



イギリスの記憶の流れの中で

人間の探究
総合文化プログラム（文化情報科学群） 教授 山内 久明

ラジオで3度、テレビで一度、教材制作に携わって参りました。このうち、「英語Ⅳ(99)」は平成14年度が最終放映年度に当たりますが、大学院科目「地域文化研究Ⅲ(ヨーロッパの文化と社会ーイギリスを中心として)」の放映開始と同時に、専任として着任いたしました。平成15年度放送予定の「イギ

リス文学」の制作が控えております。

発足当初、放送大学のアカデミック・スタンダードは未知であったわけですが、客員として関与した期間を通じて、既存の大学に身を置く立場上、いづこの大学でも通用する普遍性を念頭に置きながら、番組制作に当たってきたつもり

です。私は1960年代後半と1970年代の前半を通じてイギリスに留まって研究を続けておりましたが、その時期にイギリスでは、世界の遠隔教育の原型ともいえるオープン・ユニヴァーシティが開学し、以来成果を挙げて参りました。



この4月に放送大学に加わりました。客員教授としての関係は、非常に古く、1980年代に始まりました。まず、故・柴田南雄先生といっしょに講義を作り、次に、ひとりで1991年から『民族音楽学』を担当し、さらに1996年からは、より総合的な『民族音楽学理論』を担当しました。これらの3つの講義で、

そこで出される学位に対する社会的評価と効用が、既存の大学に比べて遜色のないものであるために必要な充実した教育が行われていることと、「遠隔」の規模が国境を越えてグローバルであることに強く印象づけられます。

新しい芸術観

人間の探究
政策経営プログラム 教授 徳丸 吉彦

民族音楽学が人間と音楽の関係を研究するもので、特定の音楽様式（しばしば「民族音楽」と呼ばれます）だけを対象とするものではない、という主張を続けてきました。幸い、放送大学という強いメディアのお蔭で、この主張が次第に理解されるようになりました。『民族音楽学』の印刷教材は、中国語訳がすでに出版され、韓国語訳も出版をまっばかりの状態になりました。この4月からは、利光功先生と『芸術文化政策I(02):社会における人間と芸術』を担当しています。これから、来年度に

7年前に東京大学で一度定年を迎え、今回日本女子大学を依願退職して移籍した身で、放送大学での在任期間は短いものとなりますが、最善を尽くしたい所存です。

むけて、青山昌文先生と一緒に『芸術・文化・社会』を制作しますが、ここでも、様式を越えて、新しい芸術観を提示したいと思っています。

芸術文化政策の研究と実践に関係する仕事としては、ヴェトナム宮廷音楽の活性化プロジェクトが一段落しましたので、ヴェトナムの少数民族の人々が自分たちで自分たちの上演芸術を映像記録するのを助けるプロジェクト（代表：大阪大学の山口修教授）に加わり、秋にはヴェトナム北部の山岳地帯に入る予定です。

新しい技術と社会の発展

大阪学習センター所長 西原 浩

その応用分野です。それらのシステムを働かせるのに必要なハードウェアについて研究をしてきました。

しかし、放送大学は個々の専門分野の深いところを学ぶところではなく、それらの技術がどのように社会の発展に影響を与えてきたか、また人々の生活を豊かにしていくなどの視点を学ぶところだろうと考えています。そのような視点をエレクトロニクスの実例を通して学べるように授業の準備をするのが私にとっての課題です。

大阪学習センターは、現在約4,000人の学生を抱える大セ

ンターです。また、建物は約1年前に新築されたばかりであり、設備も整備され、素晴らしい環境にあります。しかし、東京首都圏における人口に対する放送大学生数は約0.1%であり、大阪府のそれは約半分です。大阪府下にも、東京首都圏なみに学生予備軍がおられるはずであり、その学生数増加が課題ですが、それが実現しますと、今の施設では到底収容できなくなりますので、もう一つセンターを増やさなければならなくなります。そんなことを夢見ながら、発展に微力を尽くしたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

退任のあいさつ



本年3月末をもって放送大学を退任いたしました。専任教員としても、埼玉学習センター所長としても、任期の半ばで退くことは大変心残りですが、健康上の理由ということでご寛容いただきたいと存じます。

平成2年8月に30年間勤務した東京都から本学に移り、障害者福祉を中心とした社会福

障害をもつ人たち、そして学習センターのこと

生活と福祉 教授 三ッ木 任一

祉領域の科目の編成、教材の作成などを担当してまいりました。また、学長からの特命で、身体障害をもつ学生の受け入れ体制の改善に関する検討を担当し、調査研究、特別措置の認定などに関わってきました。具体的な課題のいくつかはその都度解決を図りましたが、まとまった経費を要する事業についてはほとんど実現しませんでした。

最後の5年間は、埼玉学習センターの所長を兼務しました。学習センターはまさにそこが大学のキャンパスですので、

変化のある充実した日々を過ごすことができました。「埼玉の放送大学」と銘打って、学習条件の改善、地方自治体との連携、学生の募集に努めました。国立療養所に入院している学生を対象としてセンター外別室受験を実現できたのも、学習センターに関わっていたお蔭でした。

今後4年間、客員教員として勤務する予定です。

放送大学とそこに学ぶ学生の皆様のますますのご発展をお祈りして、退任のごあいさつとします。



お世話様になりました

生活と福祉 助教授 今井 悦子

頂きました。このような経験は本当に放送大学ならではのことで大変感謝しております。

面接授業をされた先生方が異口同音に仰ることは、放送大学の学生さんは前の方から着席し、おしゃべりなどもってのほかで講義を一言も聞き漏らすまいと一心に勉強されるということです。私が専門とします調理学などは、若いお嬢さん方への講義では何を質問しても反応が返ってきませんが、放送大学ではいろいろな答えが返ってきて、場合によっては相反する意見も出されます。それでこそ授業が面白くなり、なぜかと考えることができるわけです。教え

る側として、教師冥利に尽きる思いです。

大学で学ぶということは、ただ教えられたことを受身で覚えるだけではなく、常になぜかと考え、答えを求めて自分で調べるという能動的態度を身に付けることだと、それは学ぼうという強い意志をもった放送大学の学生さんなら可能だと私は思っています。

最後に、放送大学の益々の発展と学生の皆さんのご活躍をお祈り致します。また、アンケートにご協力頂いた多くの学生さんに、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

平成14年度大学院開設科目紹介

福祉政策 I (02)

この講義では、福祉政策が直面している新たな課題を明らかにするために、社会福祉の政策、制度、実践をできるだけ広い視野と強い問題解決意識をもって扱うことを目指しました。

大学院で学ぶ人を対象とした「福祉政策」の教材の先例が殆どない中で、制度構想あるいは政策提案の学としての「福祉政策学」の講義をすることは私たちにとって一つの挑戦でした。

しかし幸いなことに、社会福祉学と行政学の研究者の協力によって作られたこの講義では、理論と実践が交錯する福祉現場への建設的な貢献の道筋の可能性を示すことができたと思います。

講義の内容は大きく3つの柱から成り立っています。1つは総論部分として福祉政策の特質を示し、それを現在起こっている新たな波の中に位置づけています。2つ目は各論として児童家庭福祉、

高齢者福祉、障害者福祉、生活保護、地域福祉などの制度と政策の課題を明らかにしています。3つ目は領域を横断する重要なテーマとして、危機管理、福祉の法律と政治及び福祉サービスの供給体制、福祉の財源と人材などを取り上げています。

今、福祉研究は単に現状ないし歴史を認識するだけでなく、複雑な人と制度の相互作用をふまえて、地域と住民の抱える諸問題を



政策経営プログラム 教授 松村 祥子
千葉大学 教授 大森 彌

解決する方向を目指さねばなりません。福祉をめぐるさまざまな意見と利害をもった人の状況を把握し政策形成に繋げることが必要です。

福祉政策という分野に興味をもつ人が私たちとともに、新たな福祉を築く「革新的突破口」(break-through)ともいえる研究成果を生みだしていくことを強く期待しています。



学校臨床心理学 (02)

学校臨床心理学は、未だ生まれ間で間もない、新しい学問領域である。従来は、臨床心理学の一分野として扱われてきたものだが、昨今の学校内の心理的諸問題の増加に対応し、健全な学校生活をどうやって築くべきかをより有効に考えてゆくことを目的として、独立した。

しかし、新しい学問領域であるために、学校臨床心理学には独自の理論体系と方法論が確立されていない。母体である臨床心理学同様、近接する諸領域の理論から、考え方や対応の仕方を借りてこななければならないのが実状である。そのため、私たちは社会学、哲学、

教育学、精神医学などを広く学ぶとともに、実践に当たっても、力動的な立場や行動療法の立場など、種々の立場にも公平な関心を向け、どの理論と立場が最も現実に適合しているか、自ら検討する姿勢が求められる。従って、この学問を学び、実践してゆくためには、たえざる研鑽と努力が必須となる。

はじめは学校臨床心理学は、何か諸理論や諸科学の寄せ集めのように見えるかも知れない。しかし、近接諸科学を深く学び、種々の立場からの実践の経験を積むうちに、やがて自らの考えが作られ、自らの方法が得られてゆくはずである。

臨床心理プログラム 教授 馬場 謙一

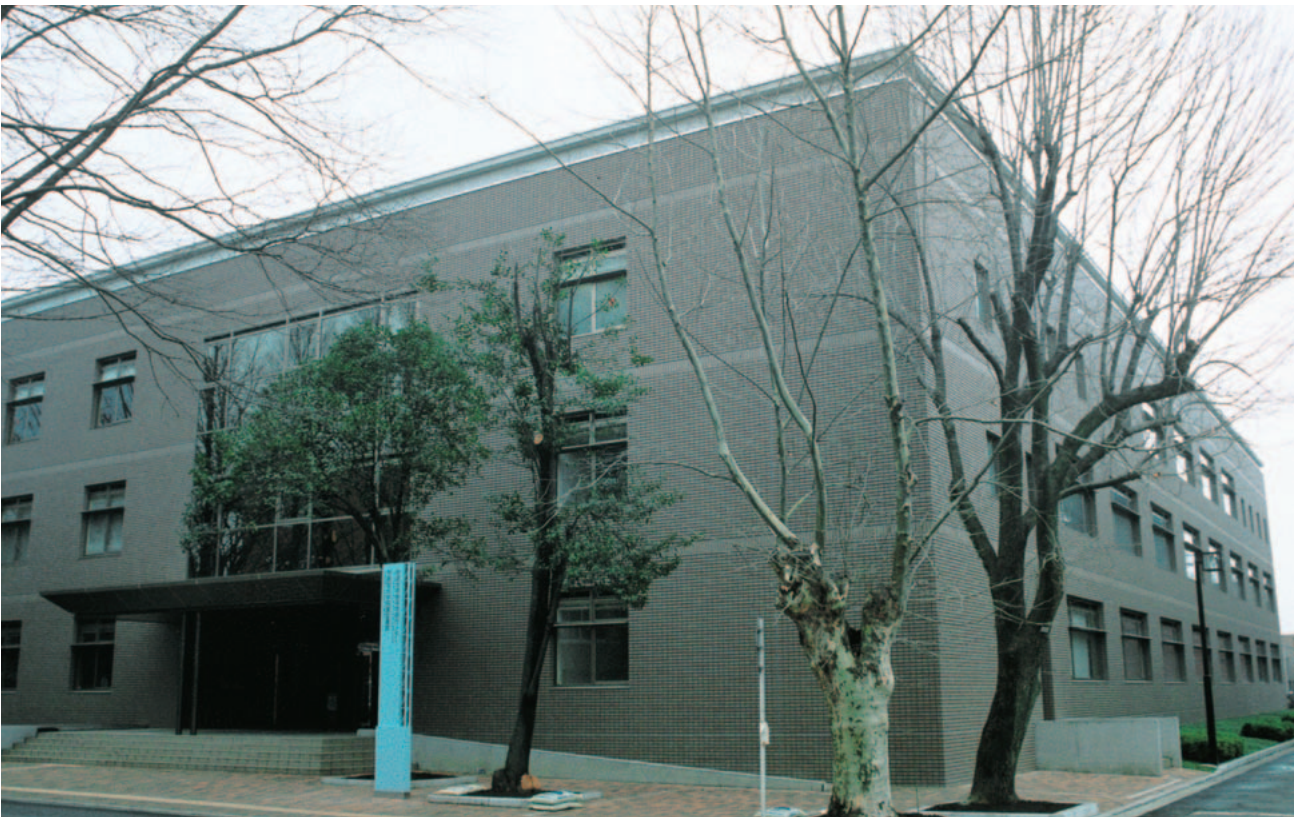
学校臨床心理学が、諸理論のモザイク的寄せ集めでなく、独自の理論と方法を確立するためには、私たち一人一人の地道な勉強と、着実な実践活動を日々積み上げてゆくほかはない。皆さんの努力に期待するゆえんである。



栃木学習センターの整備

—地域社会への浸透をめざして—

栃木学習センター所長 平川 晋吾



栃木学習センターは、宇都宮市東方の、私達が“峰ヶ丘”と呼んでいるおだやかな丘陵に建つ宇都宮大学構内にあります。当学習センターは、平成7年4月に設置され、大学構内の「生涯学習教育研究センター」の施設を借用して業務を行ってきました。

平成12年度に宇都宮大学附属図書館の改修に伴い合築による新学舎の計画が示されて、平成13年度末に待望の新学舎が完成しました。フランス式庭園を見渡せる旧学舎から移転した新学舎は附属図書館の南側に位置し、総面積が約1,200㎡あって、1階には図書・視聴学習室、実習室、学生控室、多目的室、客員教員・非常勤講師控室、会議室、所長室、事務室があり、2階には、大講義室、小講義室、実験室、準備室、学生相談室、保健室などがそれぞれ機能的に配置され、最新のAV機器等の導入により快適な学習環境が実現しました。また、附属図書館と共有のアトリウムに見える廊下には、絵画等約10点を展示し学生を楽しませています。なお、図書の閲覧については、セ

ンター所有の図書に加えて附属図書館の開架図書約10万冊も利用することができます。

以上の様にこの度の学舎合築によって、学習センターの学習機能並びに学習環境が大幅に改善されました。

当学習センターでは栃木県内はもとより隣接する茨城県の学生も加え、学生数も年々増えつづけて1,000人以上の学生が学んでいます。

今後は新学舎を学びやすい場所にして、地域における学習センターの充実と発展をはかりたいと念じています。



教養学部学生募集

放送大学教養学部では、平成14年度第2学期の学生募集を以下のとおり行います。

平成14年6月15日(土) …平成14年度第2学期学生募集要項配布開始

出願期間	平成14年6月15日(土)～平成14年8月15日(木)
可否通知等	平成14年8月上旬～平成14年9月上旬
学費の納入	平成14年8月上旬～平成14年9月中旬
入学許可通知・印刷教材等の配送	平成14年8月中旬～平成14年9月下旬
授業開始	平成14年10月1日(火)

- ・放送大学教養学部では、平成14年10月1日から始まる新学期の学生募集を行います。
- ・放送大学に関心があるご友人、ご親戚他お知り合いの方にも、この機会にぜひ本学についてご紹介ください、入学をお薦めいただくようお願い申し上げます。
- また、平成14年9月末をもって学籍が切れる学生の方で、平成14年度第2学期以降も引続き学習を希望される場合は、改めて入学手続きが必要となりますが、入学科が割引になります。
- ・出願締切日は**平成14年8月15日(木)〈必着〉**です。

大学院文化科学研究科学生募集

放送大学大学院文化科学研究科では、平成14年度第2学期修士科目生及び平成15年度修士全科生の学生募集を以下のとおり行います。

平成14年6月15日(土) …平成14年度第2学期修士科目生学生募集要項及び
平成15年度修士全科生学生募集要項配布開始

○修士科目生(平成14年10月入学)

出願期間	平成14年6月15日(土)～平成14年8月15日(木)
可否通知等	平成14年8月上旬～平成14年9月上旬
学費の納入	平成14年8月上旬～平成14年9月中旬
入学許可通知・印刷教材等の配送	平成14年8月中旬～平成14年9月下旬
平成14年度第2学期授業開始	平成14年10月1日(火)

○修士全科生(平成15年4月入学)

出願期間	平成14年9月1日(日)～平成14年9月14日(土)
第一次選考(書類選考)	平成14年10月上旬
第一次選考(書類選考)可否通知	平成14年10月16日(水) 発送
第二次選考(小論文試験)	平成14年10月27日(日)
第二次選考(面接試験)	平成14年11月16日(土)～平成14年11月17日(日)
可否通知等	平成14年12月13日(金) 発送
学費の納入	平成15年3月上旬～平成15年3月中旬
入学許可通知・印刷教材等の配送	平成15年3月上旬～平成15年3月下旬
平成15年度授業開始	平成15年4月1日(火)

- ・放送大学大学院文化科学研究科では、平成14年10月入学の修士科目生と平成15年4月入学の修士全科生の学生募集を行います。
- ・修士全科生は、修士課程を修了して、学位「修士(学術)」の取得を目指す学生です。
- ・大学卒業(卒業見込みを含む)の方またはこれと同等以上の学力があると認められた方[※]に対し、入学者選考を行った上で入学を許可します。
- ・修士科目生は、自分の学習・研究したい科目を選択して、1科目から履修する学生です。18歳以上であればどなたでも入学でき、入学試験はありません。
- ・修士科目生として修得した単位は、本学大学院に修士全科生として入学した場合、修了に必要な単位として通算される場合があります。
- ・修士科目生には、教養学部と同様に入学科の割引制度があります。

※平成14年8月1日(木)～8月10日(土)までに出席資格事前審査があります。詳細は募集要項をご覧ください。

- ・募集要項(出願書類を含む)は、各地の学習センター及び大学本部などにおいて直接配布しているほか、郵送(ハガキ)や放送大学のホームページからも請求できますので、ご利用ください。**〈募集要項・送料は無料です〉**

募集要項請求専用フリーダイヤル 0120-864-600

来学期も引き続き学籍のある**在学生の方**は、「**科目登録申請要項**」で**7月27日(土)〈消印〉～8月10日(土)〈必着〉**までに科目登録を行う必要があります。(科目登録申請開始の8日前になっても関係資料が未着もしくは紛失した場合は大学本部等にお問い合わせください。[詳細は学生生活の葉をご参照ください])

編集後記

このところ研究の一環として、15～17世紀にヨーロッパで制作された古地図を色々と眺めている。中でも世界地図は、単に地理的な情報の集積に止まらず、当時のヨーロッパ人の世界観が表現されていて、興味が尽きない。

これらの古い世界地図を時系列に沿って見てゆくと、ヨーロッパ世界の遙か東の果てに日本が「発見」され、次第に列島の姿も整ったものへと変化してゆくことがわかる。ヨーロッパ人による日本の「発見」は、日本人の側からすると、未知のヨーロッパ世界との「出会い」でもあった。それまでの日本人の伝統的な世界観は根底から覆され、以後の日本歴史もその影響を大きく蒙ることになるのである。

皆さんが本号を手になされる頃には、サッカー・ワールドカップが開催され、日本中が大いに沸いていることであろう。21世紀の初頭を飾るこの世界的イベントで、世界は日本の何を「発見」し、日本は世界とどのような「出会い」をするのであろうか。これまた興味が尽きない。

(杉森哲也)

大学通信編集委員会

(平成14年度)

委員長	教授	阿部 齊
副委員長	同	柏倉康夫
委員	同	徳丸吉彦
〃	助教授	臼井永男
〃	同	坂井素思
〃	同	杉森哲也
〃	同	大橋理枝

(編集事務担当)

教務部修学指導課)



放送大学学園

<http://www.u-air.ac.jp/hp>

ISSN 1343-3369

r2100